



説教要旨「完全に別人格？」

ルカによる福音書 23章 13～25節

オリーブ山でユダヤ人たちに捕らえられたイエス様は、ユダヤ人の最高決定機関である最高法院によって神を冒瀆したとして有罪を言い渡された後、ローマ総督ピラトに引き渡されました。しかし、イエス様がローマに対して暴動を起こした事実もなければ、ローマへの納税を禁じたというユダヤ人たちの訴えも事実無根であったため、ピラトはその扱いに困りました。イエスがガリラヤの出身であることを知ったピラトは、ガリラヤの領主であるヘロデのもとに身柄を引き渡しましたが、ヘロデもまたイエス様を処刑せずにピラトのもとに送り返されたのです。

ピラトはイエスを訴え出た祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、「この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから鞭で懲らしめて釈放しよう」（16節）と提案します。しかし人々は「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」（18節）と叫ぶのです。ピラトはそれでもなお、イエス様を釈放しようとして彼らに呼びかけます。しかし人々は「十字架につける、十字架につける」（21節）と叫び続けます。ピラトはなおもイエス様を釈放しようと訴えます。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」（22節）と三度、イエスの釈放することを呼びかけますが、「人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた」（23節）のです。

最高法院のユダヤ人たち、ヘロデ・アンティパス、そしてローマ総督ピラト、誰も責任を取ろうとせず、責任を押しつけあい、最後には「人々」という顔の見えない不特定多数によってイエス様の死刑が決定しました。そして、名前もしれず、顔の見えない民衆の声によって、何の罪も見いだされなかったイエス・キリストは十字架につけられるのです。

誰もその理不尽の責任を負おうとしない無責任な裁判のなかで、ただ1人、イエス様はその人々の罪の責任を負われたのです。この無責任な裁きが、わたしたちの目の前でも当たり前のように繰り返されているのではないのでしょうか。

(2021・3・21 説教者：稲垣真実)